釧路市立音別小学校

（開校　明治四十一年四月）

「音別町史、昭和六十年刊」によれば、学校設置以前の教育といえば、明治三十一年から殖民区画が完了した直別原野に、翌三十二年には尺別、音別原野に入植が許可されたことにより、住民の数が増加していった。しかし、依然として教育施設が無かったので、資力のある者は釧路や白糠などの縁者や知人に師弟をあずけて学校へ通わせたが、資力の無いものはそれも出来ず、手元においてのいわゆる家庭教育が明治三十三年まで続いたのである。

本町開拓開始時の状況を見るに、ほとんどの入植者がいわゆる家族連れで学齢に達している子弟を抱えていた者がいたであろうから、子弟の教育を考えないことは無かったと思われる。しかし入植当時はまず食、住の安定を図ることが第一、子供の教育まで手がまわらなかったのではないだろうか。何しろ一戸分の割り当ては約五ヘクタールで当時としては広い面積であったし、各区画地に一度に全戸が入地したのではなく、音別原野を例にとっても、道路用地は区画されてはいるものの道路は施設されてなかった。それに、音別川沿いに川西までの間は飛び飛びの入地であったし、学齢児童の数も少なかったと見えて児童の教育問題が話題に上るようになったのは、入植後三、四年経ってからであった。

明治三十三年に、福島県相馬郡出身の開拓者達が主となって、学校設置の運動を進めた（故石田クマ談）ことにより、翌三十四年四月二十日付けで許可があり、同年六月一日から授業が開始された。施設は当時の尺別村字尺別1番地に村内有志の寄附金によって建てられたが、教室と教員住宅とが合わさった小さな建物であった。（七七〇頁）

明治三四年　六月　有志により教育所ができる
三六年　四月　上記教育所が尺別簡易教育所と正式認可される
教育年限四年　（四学級、二十四名）

明治三十六年から三十八年にかけて、現在の国鉄根室本線の開通、さらに明治四十年に音別に軍馬補充部派出所が置かれて村の中心が音別駅付近に集約化されたことから、学校移転問題が起こり、明治四十一年に尺別簡易教育所は閉鎖され、音別と尺別に分離、音別原野基線一二番の一に音別尋常小学校、尺別原野の公共用地に尺別教育所が設けられたのである。

以来、各地区住民の増加に伴い、尺別、直別、茶安別、本流、霧里、尺別炭鉱、大井牧場、さらに中音別などに教育施設としての教育所や小中学校が設置されていった。（前掲書　七七一頁）

明治四一年　四月　音別尋常小学校開設（六年制）
大正　九年　七月　高等科併置　音別尋常高等小学校と改称
一〇年　四月　校章制定
昭和二七年　三月　十勝沖地震により校舎倒壊
二八年　一月　災害復旧工事により新校舎完成
四〇年　中音別小学校閉校（昭和二十三年六月開校）
五三年　四月　直別小学校閉校（本校に統合）
六二年　四月　開校八十周年記念式典
平成一五年一一月　開校百周年記念式典
一七年一〇月　釧路市・阿寒町との合併により釧路市立音別小学校と改称

教育目標

◎考える子
（いつもなぜと考える子になろう）
◎豊かな心の子
（美しいものに感動する子になろう）
◎なかよくする子
（相手の身になって考える子になろう）
◎はたらく
（美しい環境をつくり出す子になろう）

◎いのちを大切にする子
（心も体もたくましい子になろう）

校　章

大正十年四月十一日　制定
作者、校章の由来、意図など不詳

校歌の制定

校歌は紅林　晃作詞、橋本　道博作曲によるものであるが、制定日は確定されていない。紅林　晃先生は、音別町の出身、函館師範学校を卒業後、請われて母校音別小学校に勤務、後に北海道教育庁社会課長、図書館長などを歴任、北海道教育委員会委員長を務められた逸材である。

筆者の知るところでは、釧路市立美原中学校、北海道釧路北高等学校校歌の作詞をされており、そのたびごとに、歌詞についてその意味するところ、背景、生徒に送ることば等を残しておられる。それならば、母校の校歌について「一文」あって然りと、昨年来、本校藤田千津校長先生にお願いして、学校保存文書、諸記録等を検索してもらったが、資料として確認する物は存在しないという。

ややあって、藤田校長から一報が届いた。昭和三十四年三月二十日発行の「学校便り」が見つかったという。早速見せてもらうと、

「発行者は北沢清四郎先生（第十一代校長）、通算二七号、「学事報告特集」とあり、校長先生の挨拶、本校教育目標、音別小学校職員一覧、六か年精皆勤者名などのほかに、なんと音別小学校校歌の歌詞が掲載されていたのである。正しく第一節から三節まで、作詞紅林　晃、作曲橋本　道博とある。そうすると、制定は昭和三十三年度中と推察して間違いがなさそうである。当時在職された先生方や該当する卒業生にも尋ねたが、確たる回答を得ることが出来なかった。当時の事情を知っておられる方々の連絡を期待したいところである。

ところで、音別の「紅林家」と言えば、華麗なる教育一家と言うことができる。紅林晃先生の父君である紅林鉄雄先生は、昭和十一年から十五年まで音別小学校の校長を務められ、後に戦後公選第一号の音別町長の重責を担われた方であり、晃先生はその次男である。

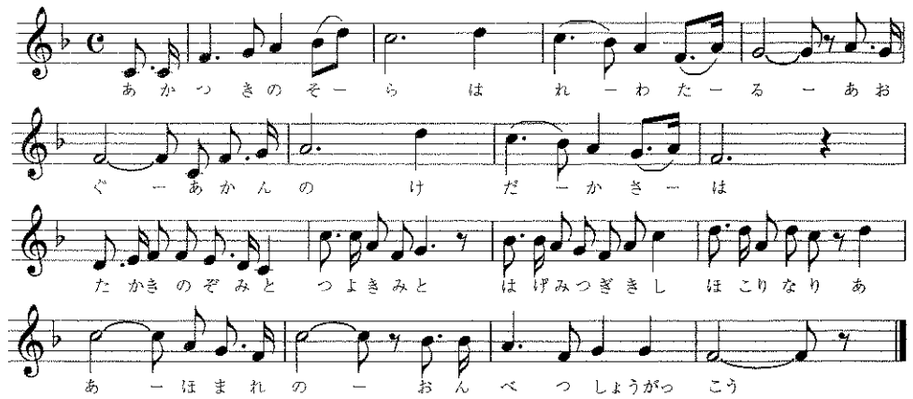
さて、紅林鉄雄先生が、明治四十二年四月、音別第二小学校へ赴任する様子を先生自らが書かれている。「音別町史、七七六頁」の一部であるが「（前略）任地は音別駅からの奥地十八キロメートルの地点なので、人も物も全部馬の背を借りるより他無く、二頭の駄馬に荷物をつけ、それに私と家内が二歳の幼児を背負ったまま乗馬し、昼尚暗い里道をたどってやっと目的地に着く（後略）」とあり、あまりにも貧しい学校の建造の有様に驚き、教員住宅も六畳二間、畳はオンボロ、掃除の塵埃は塵取で五杯、奥様は「何の因果でこんな酷いところへ」と嘆かれたという。以下は、紙幅の関係で省略する。文章の中で「二歳の幼児」とあるが、この方がご長男で、明治四十年生まれ。少年は長じて父君と同じ教職の道を歩まれ、後に阿寒町立布伏内小学校長になられた紅林英雄先生で、戦後二十一年現職で亡くなられている。英雄先生は同じ教員のトミさんと結婚。昭和十九年十月十九日に生を受けたご子息が、平成十六年から音別町教育長で、現在釧路市音別行政センター長の紅林昌宏氏である。

昨年、快く面会いただいた昌宏氏は「父も母も私が幼い頃亡くなって、あまり記憶がありません。数年前、布伏内小学校を訪れた際、校長室の金庫から父や母の写真、履歴書を見つけましてね。今は懐かしい思い出の品々です」としみじみと語られた。

参考資料　「音別町史」　（昭和六十年十二月二十日）
記念誌「風雪八十年」　（昭和六十三年）

音別小学校 校歌

紅林　晃　作詞
橋本道博　作曲



音別小学校校歌

一
あかつきの空　晴れわたる
あおぐ阿寒の　気高さは
高きのぞみと　強き身と
はげみつぎきし　ほこりなり
ああ　ほまれの音別小学校

二
光はてなき　太平洋
世界の文化　めぐる海
真理のいずみ　ともにくみ
ゆたかな知識　身につけん
ああ　希望の音別小学校

三
まなびや高く　かけわたす
にじは七色　ともの橋
正しき道に　手をとりつ
まことのつとめ　いざ果たさん
ああ　よろこびの音別小学校

釧路市立東雲小学校

（開校　平成十七年四月一日）

釧路市では、少子化の影響から学校統合の波が押し寄せ、平成十六年度から小中学校十三校を六校に統合することとなった。

釧路市立東雲小学校は、桂恋小学校と白樺台小学校が平成十七年四月一日統合し、白樺台小学校の校舎を新たな学び舎として、歴史の第一歩を踏み出したのである。

初代校長　高橋優夫先生、開校時九学級、児童数二一〇名である。

校名の由来

釧路の東「日いずるところ」に位置し、未来につながる新たな始まりを踏み出す。

教育目標

◎ゆめいっぱいすすんでいく東雲の子

○　やさしい子　　○　ちえある子　　○　げんきな子

校章と校章の意図

校章は平成十六年七月二十一日制定
製作者　山崎　忍氏
〈校章について〉
円は昇る太陽。下部に太平洋の波と砂浜。躍動する波は「元気」を、砂浜は確固として揺るぎない「信念」の意を。校名の左に別名シノノメ草とも呼ばれるアサガオの花で「愛情・優しさ」を、葉は育まれる「知恵」を表現しています。
白いカモメには「けがれない、真実を追究する心」、カモメ二羽および吹き上がる波頭二つは統合前の桂恋小と白樺台小の子ども。多くのオブジェクトで、夢や希望をたくさん持ってほしいとの親の願い、多種多様な存在を意識し、自己をしっかり見つめ、他者を尊重する気持ちを持ってほしいという社会の願いを込めました。

校歌の制定と作者の意図

校歌は、平成十六年九月一日付で制定された。**斉藤　彩美**作詞、**ヒートボイス**作曲による。斉藤彩美氏は「校歌にたくして」と題して作詞者としての意図を書いている。

東雲とは和語であり千年の時を超えて残る日本文化の中に生み出された言葉である。もともと「あけがた」という意味があり「日の出るところ」をイメージすることができる。日の出は一日の始まりであり、新たなことの始まりである。釧路市の最も東に位置し、まさに「日の出るところ」にある二つの小学校が統合して日々新しく元気の漲る東雲小学校が誕生する。私たちの大切な財産であり、これから未来を築いていく子どもたちに豊かな知恵と勇気、自信を身につけ大きく羽ばたいてほしい。教職員、保護者、地域がしっかりと重なり合い開かれた学校で夢いっぱい進んでいく東雲の子を育んでほしいとの願いを込めた。

（一番）　東雲という校名から曲の始めに「あけぼの」を使い、そこにいる子どもたちを「華」にたとえた。桂恋の長い歴史を支えた海のように大きく、たくましく生きていくために子どもたちは心と体を鍛え、未来に輝く力を身につけてほしいとの願いを込めた。

（二番）　多くの自然に囲まれ、澄んだ空に暖かく包まれながら、思いやり豊かで溢れる優しさをもってのびのびと成長してほしい。自分をさがし、両手を広げたくさんの夢と希望をつかみ新しい時代を生き抜いていく人になってほしいとの願いを込めた。

参考資料　平成十七年度　学校要覧、学校保存文書